西南学院大学　国際文化論集　第三十四巻　第二号　四六九－四八八頁　二〇二〇年三月

日本とスコットランドへの旅
――ジョン・H・ディクソンと夏目金之助をめぐって――

西　村　将　洋

序　言

本稿は、無署名の新聞記事 “Some Impressions of Japan”, in *Aberdeen Journal*, 30 October 1899, p.7 の《翻訳》と、関連文献を交えた《考察》からなる。この新聞記事を掲載した *Aberdeen Journal* は、スコットランド北東部に位置するアバディーンシャー（Aberdeenshire）で、出版社の D. C. Thomson & Co. Ltd が発行していた地方新聞であり、同じ出版社による *The Aberdeen Weekly Journal* の一八九九年一一月一日発行分（一〇ページ）にも、全く同じ記事が再掲載されている。

右の記事は、冒頭部分で記されるように、日本滞在中のジョン・H・ディクソン（John Henry Dixon 1838–1926）から、アバディーンシャーの港湾都市アバディーン（Aberdeen）に住む、アレクサンダー・フォーブス（Alexander

Forbes 1835–没年未詳）へ宛てた書簡を引用するかたちで構成されている。

手紙の送り主であるディクソンは、この記事の約三年後、一九〇二年一〇月にイギリス留学中の夏目金之助（後の小説家漱石）とスコットランドで交流することになる人物であり、ディクソンが訪日経験を持つことは先行研究においても言及されてきた。ただし、関係資料が不足していたために、ディクソンの日本滞在に関する情報は、具体的な期間や場所も含めて明らかにされていなかった。今回の拙訳は、そのディクソン日本滞在の一端を紹介するものである。

ディクソンが手紙を送ったフォーブスは、一八八七年から一八八九年までアバディーン商工会議所の会頭をつとめた人物で、アバディーンシャーの歴史や考古学に関する出版社にも関係していた[1]（ディクソンは地誌や考古学に強い関心を持っていた）。

本論では、最初に翻訳による新聞記事の紹介を行い、それを引き継ぐかたちで、漱石とディクソンについての基本情報を確認する。続いて、本誌本号に別載した拙訳「ジョン・H・ディクソン「現代日本の美術家たちについて」――一九〇二年、ロンドン日本協会での発表論文（翻訳と注釈）」（以下、「日本の美術家」と略称する。なお、この翻訳は【①議長挨拶】【②ディクソンの論文】【③ディスカッション】【④絵画の展示リスト】の四項目で構成されており、本論ではそれらの項目も記した）などの関連文献を参照し、ディクソンの日本滞在に関する伝記的な考察を試みたい。後半では、舞台をスコットランドに移して、ディクソンと漱石の関係についての基礎的な分析も行うつもりである。本稿末尾には、参考資料としてディクソンの年譜をまとめた。

《翻　訳》

日本の印象

アレクサンダー・フォーブス氏（アバディーン、マーケット・ストリート在住）は、友人のジョン・H・ディクソン氏から興味深い手紙を受け取った。現在、ディクソン氏は日本に滞在中で、エジプト、清国、そして日本の印象について記している。その手紙のなかでディクソン氏は、ポート・サイドでの滞在から判断すると、エジプトは残念ながら平凡な土地だと言っている。ディクソン氏は言う。「ピラミッドやいくつかの墓を見てみたいとは思う。だが、それらに私が惹きつけられているとは全く感じない。しかし、清国と日本は新鮮だ。広州ほど特別な都市はない。その街は、おびただしい人の群れであふれ、幅二メートルの通りがどこまでも続き、膨大な数の店舗には、はかり知れない価値と美しさをもつ東洋の秘宝が保管されている。そこでの日々は、私の人生の中で最も驚くべきものだった。私が日本の地を踏んだのは五月一日のことだった。神戸という少し退屈な街に一週間ほど滞在して、日本の魅力はどこにあるのだろう、と私は考え始めた」。

日本人の服装についていくつか感想を述べた後、ディクソン氏は以下のように続けている。「最初の一週間が過ぎた後、私は魔法にかかってしまった。美しい田舎とその地の素敵な人々の魅力に屈したのである。私は通常の旅行者がまったく行かない田舎で過ごしている。ほぼ全ての景色が雄大である。たくさんの杉とモミの木からなる木立は、樹齢も大きさも見事で、灌木や花々は素晴らしい輝きを放っている。私はツツジにだけ言及しよう。ここはツツジの原産地である。その花を神戸でも見たが、我が国の園芸職人が同じように手入れすることも、ましてや上

回ることもできないほどに、見事に咲き乱れているのを見た。だがしかし、偉大な山々や、活火山、雄大な河、岩壁のせまる峡谷、美しい森、花の咲く森と荒れ地、温泉、滝、そしてその他の自然の驚異を描いたスケッチよりも、あなたはこの国の人々に興味を持つだろう。私はここの人々が大好きだ。彼らは高い水準の文明と文化を持つ民族だ、という印象を私は持っている。そして、彼らの上品で丁寧で親切な態度に、とても感銘を受けている。我々がする握手や挨拶のキスを、彼らは野蛮な行為だと思い、その代わりに、慎み深くて品の良いお辞儀をする。使用人は、客室に入る時と出る時にお辞儀をする。何かを手伝ってくれた子どもに銅貨をあげると、お返しに、やさしくお辞儀をする。彼らはいつも幸せそうに見えるし、すべての人を幸せにしようとしている。私はホームレスや酔っ払いを一人も見たことがない。日本人の様々な興味深い仕事は、見ていて決して退屈しない。私は太平洋に面した最も美しい港に三週間滞在した。そこからは日本最高峰の富士山がよく見え、珍しい漁船や網、米の耕作、自家栽培した綿を手織りで美しい織物にする綿織物業、育てた繭から絹を作る製糸業（これはとても大きな産業だ）、炭焼きなど、その他の多くの仕事が愉快だった。彼らの産業は決して衰えない。彼らの独創性や倹約ぶり、そして生まれもった優しさは注目に値する」。

《考　　察》

一、「発狂」事件と夏目金之助

夏目金之助が文部省第一回給費留学生としてロンドンの地を踏んだのは一九〇〇年一〇月二八日のことだった[2]。

当初はシェイクスピア研究者のクレイグ博士（William James Craig 1843–1906）のもとで個人教授を受けたが、翌一九〇一年八月頃から文学に関する原理的な著作を構想しはじめると[3]、クレイグとの関係は終わり、丹念に書き継いでいた留学日記も、同年一一月一三日を最後に完全に途絶えることになる。そしてこれ以降、心理学や社会学の書物を乱読し、膨大なメモを延々と書き溜める生活が始まる。最終的にロンドンを出発して帰国の途に就いたのは一九〇二年一二月五日のことである（金之助がロンドンを出発した五日後の一二月一〇日に、ディクソンは前述した「現代日本の美術家たちについて」と題する論文発表をロンドンで行うことになる）。

留学中の書簡や日記によると、一九〇一年七月と翌一九〇二年九月の二度、金之助は自身の精神疾患を疑っている[4]。特に一九〇二年の際には日本人留学生らにも知れ渡り、同年一〇月には東京の文部省からロンドンの藤代禎輔に「夏目精神に異常あり、藤代へ保護帰朝すべき旨伝達すべし」という電報が届くことになる[5]。この事件はその後も数多くの文献で語り継がれ、ある種の特権的な物語として現在も流通しているのだが、しかし数人の論者が述べるように、「金之助が「発狂」していたかどうかは明らかではない[6]」。

その理由の一つとして挙げられるのが旅行である。ロンドンでの「発狂」騒ぎをあざ笑うかのように、ちょうど同じ時期、金之助の姿は遠くスコットランドの地にあった。当地から一九〇二年一〇月に送られた岡倉由三郎宛書簡を引用する。

> 目下病気をかこつけに致し過去の事抔一切忘れ気楽にのんきに致居候小生は十一月七日の船にて帰国の筈故、宿の主人は二三週間とまれと親切に申し呉候へども左様にも参ら兼候当もなきにべん〳〵のらくらして居るは甚だ愚の至なれば先よい加減に切りあげて帰るべくと存候いづれ帰倫の上は一寸御目にかゝり可申と存候[7]

つまり、右の状況を要約すると次のようになる。

留学日記が途絶えた一九〇一年一一月から翌一九〇二年一二月の帰国時まで、約一年間におよぶ夏目金之助のイギリス体験は、関係者数名に宛てられた書簡によって断片的な情報は得られるものの、具体的な行動は今も謎に包まれている。日本人関係者が金之助と「発狂」を結びつけようとしたとき、その思惑を裏切るかたちで、金之助がスコットランドにいたことは、ある意味で象徴的な出来事だった。一九〇二年三月の妻鏡子宛の書簡に金之助は記す。「倫敦では日本人が大分居るが少しも交際をしない（略）世間の人間共がおれの事を何とかいひ度ても己が何をして居るか知つてる者はない[8]」。

そして、この消息不明の金之助が実際に交流していたのが、右の岡倉宛書簡に記された「宿の主人」、すなわちジョン・H・ディクソンだったのである。

二、先行研究の概要

スコットランドでの滞在について、漱石の直接的な言及を確認できる主な文献は、一九〇七年に上梓された『文学論』（大倉書店）――第四編第五章「調和法」でイギリス人の自然観を説明する際に「蘇国に招待を受けて逗留せるは宏壮なる屋敷なり」とスコットランドに「招待」された経験が回想されている[9]――と、短編集「永日小品」のなかの一篇で一九〇九年に発表された小説「昔」――この作品ではスコットランド中央部パース州の「ピトロクリ」（Pitlochry）が舞台となっている[10]――が挙げられる。その他には日記での断片的な記述があり[11]、二〇〇三年にはスコットランド旅行の際に作成したと考えられる自筆イギリス地図（東北大学漱石文庫蔵）が公開されて話題と

なった[12]。

先行研究では、スコットランドに金之助を「招待」した人物は長らく不明とされていたが、一九七四年に角野喜六氏がディクソンと特定し、金之助が宿泊した「宏壮なる屋敷」についてもDundarach Hotelの名称でピトロクリに現存することが明らかになった[13]。

その後の重要な研究としては、平川祐弘氏と稲垣瑞穂氏による二種類のディクソン追悼記事の発見が挙げられる[14]。これらの記事によってディクソンの略歴が分かったからである。ただし、両氏が紹介したのは新聞記事の切り抜き（掲載紙と発行年月日はともに不明）であったために、書誌的事項の詳細は未確認のままだった。

今回、それらの掲載紙と発行日が判明したので、以下に書誌データを紹介する（二つの記事が掲載されていたのは、いずれもスコットランドの地方紙である）。

《平川氏が紹介した新聞記事》“Noted Perthshire Man Dead : Mr John Henry Dixon, Pitlochry : Veteran in Boy Scout Movement”, in *The Courier and Advertiser*, 21 October 1926, p. 3.

《稲垣氏が紹介した新聞記事》“Death of Notable Pitlochry Man : Mr J. H. Dixon, F.S.A.”, in *Perthshire Advertiser*, 23 October 1926, p. 7.

右の追悼記事から、日本滞在と関連のある部分を抜き出すと、ディクソンは一八九九年の春から一九〇二年のあいだに海外旅行をしており、帰国後の一九〇二年からピトロクリに住みはじめた。この海外旅行については、一八九四年にバンクーバー島の原生林で狩猟をし、世界旅行には二度行った、とも記事は述べている。しかも日本には長期滞在して、日本美術に興味を持ち、日本人美術家数名との交流もあったのだという（この点の詳細は拙訳「日本の美術家」を参照されたい）。

稲垣氏はこの情報に追加するかたちで、ディクソンの生誕記録や屋敷に関する法文書、さらには邸宅敷地内に造園された日本庭園のパンフレットを紹介するとともに、複数の先行研究を検討しながら、ディクソンと金之助や日本に関する事実関係を整理している。[15] その主な内容は、以下のように要約することができる（なお、次の段落に事実関係の概略を記すが、資料的な確証のない推測部分には傍線を付し、確定的な事実とは区別した）。

ディクソンの日本滞在は一八九九年から約一年間だったと考えられる。そして英国に帰国した直後の一九〇二年春からピトロクリに自宅を購入して住みはじめた。夏目金之助がディクソン邸に滞在したのは同年一〇月上旬から約三週間前後と推定することができ、同じ年の一二月一〇日（金之助がロンドンを出発した五日後）に、ディクソンはロンドン日本協会で日本の美術家に関する論文発表を行っている。その後、ディクソンは一九〇四年から一九〇六年初めまでの時期に再び訪日したと推測され、その際に雇い入れた日本人八名（庭師四名、宮大工二名、料理人一名、友人一名）とピトロクリで一緒に暮らすことになった。その八名の日本人が帰国することになったのは、一九二一年に皇太子裕仁親王（後の昭和天皇）がピトロクリを訪問した際のことなのだという。[16]

ちなみに洋画家の五百城文哉に関する研究では、一八九七年にディクソンが日光の五百城を訪問した、という情報が複数の文献で見られるが、[17] ディクソン側の資料では一八九七年の訪日を確認することはできなかった。

三、ディクソンの日本滞在

続いて、今回紹介した文献（「日本の印象」及び「日本の美術家」）の内容を踏まえて、ディクソン来日についての事実関係を新たに再構成してみたい。

「日本の印象」によれば、ディクソンはエジプトや清国を経て、一八九九年五月一日に日本に到着し、一週間ほど神戸に滞在した後、富士山の見える太平洋沿岸の港町に三週間滞在している。一方、「日本の美術家」【①議長挨拶】では、マーカス・B・ヒューイッシュ（Marcus Bourne Huish 1843–1921）が、ディクソンは最初の世界一周旅行が終わってイギリスに帰国したが、再びすぐに日本へ旅立った、と発言している。

次に「日本の美術家」【②ディクソンの論文】から、年月の確定が可能な記述を列挙する。ディクソンは一九〇一年二月に九州の小学校で「オールド・ラング・サイン」（蛍の光）の合唱に耳をかたむけ、同年一〇月の白馬会第六回展（一〇月一〇日～一一月一三日、於 上野公園旧博覧会跡第五号館）で発生した腰巻事件に関する日本の新聞報道に言及するとともに、末尾の原注では、一九〇二年春に開催された第一二回日本絵画協会・第七回日本美術院連合絵画共進会展（三月二日～二九日、於 上野公園旧博覧会跡第五号館）を訪れたと述べている。

ここで注目したいのが、ロンドン日本協会へのディクソンの入会時期である。同協会の機関誌を参照すると、ディクソンの入会は一九〇〇年だったことがわかる。[18] だとすると、日本滞在中にロンドンの団体の入会手続きを行ったとは考えにくいので、ディクソンは一九〇〇年頃に日本から一旦イギリスに帰国し、その際にロンドン日本協会に入会した、と推測することができる。このディクソンの一時帰国を想定することで、前述したヒューイッシュの発言とも整合性が生まれることになる。

以上の情報を改めて時間軸上に再配置すると、ディクソンの一回目の訪日は一八九九年五月一日から始まり、一九〇〇年頃には一度イギリスに帰国するとともに、少なくとも一九〇一年二月から翌一九〇二年三月までは日本で二度目の滞在していた、とまとめることができる（稲垣氏が主張するように、ディクソンが一九〇四年から一九〇

六年初めにかけて訪日したかどうかについては不明である）。

滞在地については、「日本の印象」によれば、一度目の来日で神戸や富士山の見える太平洋沿岸の港町に滞在しており、「日本の美術家」【②ディクソンの論文】を参照すると、二度目の日本訪問時の滞在場所としては、奈良、九州、東京などを挙げることができる。それ以外にも滞在時期は不明だが、少なくとも甲府、京都、日光に滞在したと【②ディクソンの論文】には記されている。なおこの他にも、スコットランドのPerth Museum and Art Galleryが開催したExtraordinary: A People Called Ainu展（二〇〇五年～二〇〇六年）では、ディクソン旧蔵のアイヌ民俗資料が一般公開された。このことから北海道のアイヌの村も滞在地の一つだったと考えられている[19]。

一方、日本滞在の動機としては、第一にディクソンの日本美術への関心が挙げられるが、それと同等に見逃せないのが、日本人の生活習慣、特に礼儀作法に特別な興味を持っていた、という事実である。この点について「日本の印象」では、日本人のお辞儀についてのエピソードが語られているし、「日本の美術家」【②ディクソンの論文】では、洋画家の小笠原豊涯による食事の作法を熱心に記録し、後半部分に至ると、都市圏よりも日本の地方を好む理由として、礼儀作法や習慣という点で外国の影響が少ないからだ、と述べている。

つまり、美術鑑賞などの視覚的なレベルでの文化受容とどまらず、礼儀作法に見られるような日本人の身体的な文化や、それらの習慣から想像される人間性に対しても、ディクソンは強く惹きつけられていたのである。

四、漱石とイギリス人イメージ

最後に、二つの観点から漱石とディクソンの関係について基礎的な考察を行いたい。

一点目は両者の齟齬である。漱石は『文学論』第四編第五章「調和法」で、自然界の景物が人の「情」を動かすことは「洋の東西」で違いはない、と主張している。だが、「英人の自然観は到底我国に於るが如く情熱的にあらず。（略）多数の（イギリス…引用者注）人は殆んど自然に対して何等の趣味をも認めざるが如し」と、イギリス人の自然観について批判的に言及し、ここでスコットランドの回想が挿入される。ちなみに、以下のエピソードは、漱石の談話記事「イギリスの園芸」でも繰り返されている逸話である。[20]

蘇国に招待を受けて逗留せるは宏壮なる屋敷なり。ある日主人と果園を散歩して、樹間の径路悉く苔蒸せるを看て、よき具合に時代が着きて結構なりと賞めたるに、主人は近きうちに園丁に申し付けて此苔を悉く掻き払ふ積なりと答へたるを記憶す。是等は固より文学趣味なき人に就いての例なれば之を以て一般を評するは過てりと雖ども、かゝる種類の人が比較的に吾邦より多きは争ふべからざる事実なるべし。従つて彼国の文学にあらはれたる自然は吾人にとりて多少物足らぬ心地なきにあらず。[21]

だか、この漱石の言に逆らうかのように（あるいは、右の言に触発されるかのように）、その後のディクソンは日本的な自然への傾倒を強めていく。自宅敷地内で日本庭園の整備をすすめ、一九〇六年には *Japanese Garden* と題するパンフレットまで作成することになるからである。その庭は、小川や睡蓮の池、富士を模した築山が造園され、さらに雪見灯籠を配置し、樫岡神社（ダンデーフック）まで建設するという大がかりなもので、残された写真や資料から判断すると、一九世紀末から二〇世紀はじめにかけてイギリスで造園された日本庭園とも共通点をもつ、ある種のキッチュ

な日本イメージを具現化したものだったことがわかる。[22]

この日本庭園に関する評価は分かれるかもしれないが、しかし、ディクソンの「自然」に対する「情熱」には、疑問の生じる余地はないだろう。ディクソン邸の日本庭園の築山は、「日本の印象」で記された富士山の記憶を甦らせただろうし、同じ文中でツツジを称え、「日本の美術家」【②ディクソンの論文】では日本のアサガオを賞賛したディクソンは、日光の五百城文哉宅でロック・ガーデン（採取した高山植物を植えるために、高地の生育環境を再現した岩石による庭）[23]に注目し、さらに五百城によるボタニカル・アートを愛した人物でもあった。つまり、漱石が述べた固定的なイギリス人のイメージから、ディクソンは逸脱している。

ところで、前述したイギリス人観を漱石が持つに至った背景には、イギリス留学中の実体験――イギリス人を「雪見」に誘って笑われたり、金之助が「月は憐れ深きもの」と語ってイギリス人に驚かれたりした経験――が関与していたようだ。[24]だが、「英人」全体を一括して規定する語り口が、ある種の独断を含むことは争えない事実だろう。この漱石の見解に対しては、留学中の夏目金之助が述べた次の言葉が、最も正当な批評となるはずだ。

「妄リニ洋行生ノ話ヲ信ズベカラズ彼等ハ己ノ聞キタルコト見タルコトヲ universal case トシテ人ニ話ス豈計ラン其多クハ皆 particular case ナリ」。[25]

五、絵を描く日本人

こうしたすれ違いが生じていた一方で、それと同時に、ディクソンと漱石には紛れもない共振関係が成立していた。注目したいのは、日本人が絵を描くことに対して、ディクソンが強い執着をみせていた、という事実である。

もちろん、ディクソンがロンドン日本協会で発表した論文には、総勢五〇名近くの日本人洋画家が登場するのだが、ここで強調したいのは、それ以外の一般の日本人に向けられたディクソンのまなざしである。

たとえば、「日本の美術家」【②ディクソンの論文】では、チェンバレン（Basil Hall Chamberlain 1850–1935）の著作を参照しながら、日本人全般の絵の描き方と書道との関連性が説明されているが、そうした日本研究の知識だけではなく、具体的な日本での実体験においても、ディクソンは日本の小学校を訪れて生徒に素描のテストを行ったり、あるときは歩兵連隊に近づいて兵士の描いた地形図を見せてもらったりしており、日本人が絵を描く、という行為に強い関心を向けていたことがわかる。日本のホテルに滞在した際には、同宿していた日本人客に対して、ディクソンは何枚もスケッチを描かせている。

また、ディクソン自身も絵を描いた。「日本の美術家」【②ディクソンの論文】では、甲府で滞在したとき、自身の写生画を日本人に批評してもらった体験が記録されている。ディクソンの著書にはディクソン自身が描いた水彩画も掲載されている。[26]

夏目金之助が子どもの頃から絵画鑑賞を好み、作家漱石となった後も、自らの弟子たちに自作水彩画の絵はがきを送っていたことは広く知られている。しかし、少年期から青年期にかけての時期に、金之助が絵を描いた、という記録は残っていない。現存する漱石の水彩画の年記から判断すると、イギリス留学から帰国した一九〇三年から、漱石は盛んに水彩画を描くようになる、と古田亮氏は指摘している。[27]

金之助はイギリス滞在中に数々の美術館を訪れ、多くの名画を鑑賞した。だが、右にも述べたように当時の日記やメモを参照しても、金之助が絵を描いた、という明確な記録は見つからない。しかし、留学最後の時期のスコッ

トランドで、日本人が絵を描くことにこだわる「宿の主人」ディクソンと、金之助は同じ時間を共有したのである。本稿前半で引用した金之助による岡倉由三郎宛書簡には、「宿の主人」が二、三週間滞在してはどうか、と親切にすすめてくれるが、そんなことはできない、と記されていた。しかし実際には、ディクソン邸での金之助の滞在期間は延長されることになる。[28]

ところで、絵画を描くという行為には、単に漱石の個人的な趣味には止まらない、重要なポイントが含まれている。ロンドンから帰国した漱石が、作家として最初に発表した「吾輩は猫である」の第一話（『ホトトギス』一九〇五年一月）は、苦沙弥先生が水彩画に没頭する話だった。続く小説「草枕」（『新小説』一九〇六年九月）では、画工が那美さんの絵を描こうとすることが作品全体の重要なテーマとなる。あるいは『三四郎』（春陽堂、一九〇九年）には原田画伯が登場するし、こうした絵画を描くことへの関心は、その後の美術批評や南画の創作などを通じて、漱石の晩年まで持続する主題を形成していくのである。[29]

六、問題の所在

以上、この小文では、ディクソンの日本滞在に関する伝記的な考察を行うとともに、夏目金之助（漱石）とディクソンの関係に限定して基礎的な考察を試みた。

しかし、右の考察は未だ問題の核心部分には届いていない。ディクソンがロンドン日本協会の発表論文で言及した美術家たちや、実際にディクソンが所蔵した絵画の作者たちは、まさに金之助とディクソンが邂逅したそのとき、同じヨーロッパの地で悪戦苦闘しながら、日本人が絵画を描くこと、を模索していた。その美術家たちのなかには、

金之助と関係のあった浅井忠や中村不折のみならず、後に漱石が美術批評で取り上げる画家たちも複数含まれていた。[30] しかも、日本人洋画家たちの異文化交流の現場では、複数の美学的かつ政治的な思惑が入り乱れ、闘争状態が形づくられていたのである。[31]

状況は錯綜し、問題は多岐にわたるが、こうした言説場が提起する論点については、改めて拙文を準備する機会があればと考えている。

参考資料
ジョン・H・ディクソン（John Henry Dixon 1838-1926）年譜

凡　例

- 本年譜は年代に関する事項と補足の二つのパートで構成されている。
- 年代に関する事項には、資料的に確証のある歴史的事柄を記載した。
- 補足には、資料的な裏付けはないが、新聞記事や関係者の証言などで間接的に伝えられている情報を記載した。これらの情報については〔補足〕以下の部分に記すこととし、年代に関する事項とは区別した。
- 参考文献については、主として稲垣瑞穂『夏目漱石ロンドン紀行』（清文堂出版、二〇〇四年）を参照し、本誌本号に別載した拙訳「ジョン・H・ディクソン「現代日本の美術家たちについて」」の情報も適宜つけ加えた。

一八三八年、ディクソンが、イングランド北部ヨークシャーのウェークフィールド（Wakefield）で生まれる（六月三日）。父親の Benjamin Dixon は当地で弁護士をしていた。

〔補足〕ディクソン家は中部イングランドの名門だった（後のディクソンによる世界旅行やピトロクリの広大な屋敷の購入は、父親から相続した遺産によるものと推測されている）。父親はスコットランド南部のダンフリーズ（Dumfries）で育った。その父と一緒にディクソンは、一八五八年から毎年欠かさずハイランド地方（スコットランド北方高地帯）を訪れ

た。その後、ディクソンは事務弁護士（Solicitor）となって父親と働き、後継者となった。ディクソンは二一歳のときヨークシャーの行政区 West Riding で政務事務官（Deputy Clerk）に任命され、土地の事業全般に関する職務に一二年間従事した。また町の政策や社会的慈善事業にも積極的にかかわった。ディクソンは一八六六年頃から、スコットランド北西海岸の町 Gairloch を訪れるようになった。

一八七四年、病気療養のため Gairloch に移住し、以後二五年間定住した。

〔補足〕転居後のディクソンは、教育委員会のメンバーとなり、教育長もつとめた。そほかに Gairloch 中央地区の地区協議会議長や、地区の名誉職員（Hon District Clerk）にもなった。また一八八一年には、土地の義勇兵を指揮して、エジンバラで行われた記念観兵式に参加した。

一八八六年、ディクソンが Gairloch の地誌に関する著書を上梓した。書誌的事項は以下の通り。John H. Dixon, *Gairloch in North-West Ross-Shire*, Edinburgh: Co-Operative Printing Company Limited, 1886. なお本書刊行時には、既にディクソンはスコットランド考古協会（The Society of Antiquaries of Scotland）の会員となっている。

〔補足〕一八九四年には、バンクーバー島に旅行し、原生林で狩猟を行った。

一八九九年、世界一周旅行に出発し、エジプト、中国を経て日本に到着した（五月一日）。以後、神戸や富士山の見える太平洋沿岸の港町に滞在した。

〔補足〕帰国時期は不明だが、一九〇〇年前後にイギリスに一時帰国したと考えられる。

一九〇〇年、ディクソンがロンドン日本協会（The Japan Society, London）に入会した。

一九〇一年、少なくともこの年の二月から翌年三月までディクソンは日本に滞在した。滞在地としては九州、奈良、東京が挙げられる。

〔補足〕このほかに滞在時期は不明だが、甲府、京都、日光に滞在しており、北海道のアイヌの村にも滞在したと考えられている。

一九〇二年、この年の四月以降に、ディクソンがピトロクリ（Pitlochry）のダンダーラック・ハウス（Dundarach House）に居を定めた。一〇月頃に留学生の夏目金之助がディクソン邸に招待された。また一二月にディクソンはロンドン日本協会で「現代日本の美術家たちについて」（原題 "On Some Japanese Artists of To-day"）と題する論文の発表を行った（一〇日）。なお、このディクソンの論文発表の五日前（一九〇二年一二月五日）に、夏目金之助はロンドンを出発し、日本への帰国の途に就いた。

〔補足〕現地関係者の話によれば、一九〇四年から一九〇六年初めにかけてディクソンは世界旅行を行い、その際に日本から連れてきた庭師四名、宮大工二名、料理人一名、友人一名と共同生活を始めたと言われている。この頃にディクソン邸内の日本庭園の本格的な造園も始まった。またディクソンは青少年団体の育成に尽力し、青少年協力会やライフル・クラブを結成した。加えてディクソン邸の近くにあるHoly Trinity Episcopal Churchの教区委員をつとめ、教会の事務や出納の仕事にも従事した。

一九〇六年、ディクソン邸の日本庭園が完成し、小冊子*Japanese Garden*が発行された。

〔補足〕一九〇八年にディクソンがスコットランドで最初のボーイ・スカウト隊を結成した。このことからピトロクリはスコットランド・ボーイ・スカウトの発祥の地とも呼ばれている。ディクソンが一九一二年からダンダーラック・ハウス近隣の別邸Clach na Faireに転居した。このときダンダーラック・ハウスは売却せず、日本人八名が引き続き居住した。ディクソンには妻子がなく、養子Noman Fergusson Dixonを迎えたが、第一次世界大戦に出征し、一九一七年に戦死した（当時二二歳）。一九二一年に皇太子裕仁親王（後の昭和天皇）がピトロクリを訪問したことが契機となり、ディクソン邸の日本人八名が帰国することとなった。一九二三年までディクソンはボーイ・スカウト・マスターをしていた（当時八五歳）。そのため世界最年長のスカウト・マスター（the oldest scoutmaster in the world）と呼ばれていた。

一九二五年、ディクソンがピトロクリの地誌に関する著作を上梓した。書誌的事項は以下の通り。John H. Dixon, *Pitlochry, Pitlochry Past and Present: Being a Guide Book for Visitors and Tourists*, Pitlochry: L. Mackay, 1925.

一九二六年、ディクソン、八八歳で永眠（一〇月二〇日）。Holy Trinity Episcopal Churchにはディクソンの墓碑が作られ、教会の礼拝堂内にはディクソンが二一年間教会の執事として従事したことを記念する追悼牌が設置された。

【付記】漱石に関する文章は全て『漱石全集』全二八巻（岩波書店、一九九三～二〇〇四年）に依った（注では『全集』と略記した）。本稿はJSPS科研費17K02483及び西南学院大学二〇一九年度在外研究(a)の成果である。

注

（1）フォーブスは一八九八年に歴史や考古学に関する出版社New Spalding ClubでMember of Councilを務めている。詳細は、フォーブスの経歴とあわせて、Alexander Forbes, *Memorials of the Family of Forbes of Forbesfield*, Aberdeen: King's Printers, 1905, pp.25-26を参照。

（2）本稿では夏目漱石に関する年譜的事項について、荒正人『漱石文学全集 別巻 漱石研究年表』（集英社、一九七四年）及び、岩波書店漱石全集編集部編「年譜」（『全集』第二七巻）を参照している。

（3）この著述は後に『文学論』（大倉書店、一九〇七年）として公刊された。ただし一九〇二年三月一五日付の中根重一宛書簡などを参照すると、当初は『文学論』よりもさらに大きな構想を持つ著作だったことがわかる。詳細は『全集』第二二巻、二五四頁を参照。

（4）詳細は、一九〇一年七月一日付の日記（『全集』第一九巻、八九頁）と、一九〇二年九月一二日付の夏目鏡宛書簡（『全集』第二二巻、二六三頁）を参照。

（5）前掲、荒正人『漱石文学全集 別巻 漱石研究年表』二〇三頁。

（6）江藤淳『漱石とその時代（第二部）』（新潮選書、一九七〇年）二〇〇頁。藤代禎輔はスコットランド旅行直後の金之助と会っており、「今日一日見た様子では別段心配する程の事もないらしい」と述べ、文部省からの電報についても、「精神に異常があると云ふことが大袈裟に当局者の耳に響いた為」と述べている。詳細は、素人（藤代禎輔）「夏目君の片鱗」（『藝文』第八巻第二号、一九一七年二月）七三～七四頁を参照。ちなみに、一九〇一年七月一日付の金之助の日記には、「近頃非常ニ不愉快ナリ（略）神経病カト怪マルヽ」とあるが、「一方デハ非常ニヅーヅー敷処ガアル、妙ダ」と冷静な一面も記されており（『全集』第一九巻、八九頁）、一九〇二年九月一二日付の夏目鏡宛書簡でも「近頃は神経衰弱にて気分勝れず甚だ困り居候」と記しつつも、他方で「大したる事は無之候へば御安神可被下候」と述べている（『全集』第二二巻、二六三頁）。

（7）『全集』第二二巻、二六四頁。

（8）『全集』第二二巻、二五六頁。

（9）『全集』第一四巻、三一八頁。

（10）初出時のタイトルは「永日小品（二十一）昔」で『大阪朝日新聞』（一九〇九年二月二二日）に掲載された（『全集』第一二巻、一九四～一九六頁）。この作品に関係する断片なメモとして、一九〇四年から翌年にかけて記されたと推定される「断片二三」（『全集』第一九巻、一六五頁）と、一九〇九年に記された「断片五〇A」（『全集』第二〇巻、七三頁）が存在する。

（11）一九一二年八月一七日付の日記に「いゝ路なり蘇格土蘭土を思ひ出す」と記されている（『全集』第二〇巻、四〇八頁）。

（12）詳細は、曽根原理「漱石文庫所蔵「自筆イギリス地図」について」（『東北大学附属図書館調査研究室年報』第二号、二〇一四年二月）を参照。

（13）角野喜六「漱石とピトロクリーの宿所？」（『英語青年』第一一九巻第一二号、一九七四年三月）で初めて報告され、その内

容は、著書『漱石のロンドン』（荒竹出版、一九八二年）でまとめられた。

(14) 平川祐弘編『作家の世界 夏目漱石』（番町書房、一九七七年）及び、稲垣瑞穂『夏目漱石ロンドン紀行』（清文堂出版、二〇〇四年）を参照。なお、多胡吉郎『スコットランドの漱石』（文春新書、二〇〇四年）には、金之助とディクソンの対話などが記されているが、「資料的な限りがあるため、学者なら筆を抑えるところを、私は敢て想像の世界に踏み込んで問うことをタブーとしなかった」（五頁）と記されているように著者の創作である。同書は事実関係のレベルでは稲垣氏の研究に依拠している（二〇八頁）。

(15) 詳細は、前掲、稲垣瑞穂『夏目漱石ロンドン紀行』一六二～二〇一頁を参照。

(16) 皇太子裕仁親王の渡英時期は一九二一年五月三日から二九日で、スコットランド滞在は五月一九日から二四日までである。詳細は、溝口白羊『東宮御渡欧記』（日本評論社出版部、一九二一年）三七四～三七八頁を参照。

(17) たとえば、寺門寿明編「五百城文哉略年譜」（『甦る明治の洋画家　五百城文哉展』東京ステーションギャラリー、二〇〇五年）一九五頁を参照。

(18) “List of Members”, in *The Transactions and Proceedings of The Japan Society, London*, Vol. 25, 1928, p. 262.

(19) 詳細は、Jane Wilkinson, “Exhibition Reviews: Extraordinary: A People Called Ainu”, in *Journal of Museum Ethnography*, No. 19, March 2007, pp. 152–156 を参照。なお、この点との関連で言えば、新聞記事「日本の印象」第二段落前半で語られる「田舎」は、具体的な地名が記されていないものの、雄大な景色や、巨大な木立、自生するツツジなど、北海道の自然との類似点を見いだすことが可能である。

(20) 漱石の談話記事「イギリスの園芸」は『日本園芸雑誌』第一七巻第八号（一九〇五年八月一三日）に掲載された。詳細は『全集』第二五巻、一四二頁を参照。

(21) 『全集』第一四巻、三一八頁。なお引用中の「果園」とは、ディクソンがピトロクリの屋敷を購入した時の不動産広告 “PITLOCHEY—DUNDARACH-HOUSE”, in *The Times*, 9 April 1902, p. 15 を参照すると、敷地内にあったブドウ園（vinery）のことだと推測される。

(22) ディクソン邸の日本庭園に関する詳細は、前掲、稲垣瑞穂『夏目漱石ロンドン紀行』一八一～一九〇頁を参照。一九世紀末から二〇世紀初頭のイギリスでは、ジョサイア・コンドル（Josiah Conder 1852–1920）の著作 *Landscape Gardening in Japan*, Tokio: Kelly and Walsh, 1893 などの影響を受けつつ、複数の日本庭園が造園された。たとえば、エラ・クリスティー（Ella Christie 1861–1949）がスコットランドのコウデン城に造園した日本庭園は、池の造成や、富士山を見立てた築山、さらに日

本人による造園などの点で、ディクソンの日本庭園との共通点を認めることができる。この時期、横浜植木（The Yokohama Nursery Company）や京都の骨董商 Daikokuya など、日本の園芸業者が外国人相手のビジネスを展開しており、日本人庭師が海外に派遣されることもあった。詳細は、橘セツ「世界漫遊旅行者と庭園」（『神戸山手大学紀要』第一〇号、二〇〇八年）を参照。

(23) ロック・ガーデンについては、橘セツ「庭園をめぐるライフヒストリー／ライフジオグラフィー」（『神戸山手大学紀要』第八号、二〇〇六年）を参照。

(24) 『全集』第一四巻、三一八頁。

(25) 引用は一九〇一年一月五日付の日記より（『全集』第一九巻、四四頁）。このように留学中の金之助と、留学後の漱石の言のあいだには〈距離〉が見られる場合がある。こうした〈距離〉の問題は、留学後の漱石が発表した近代化論を解釈する際にも、無視できないポイントを形成するのではないかと論者は考えている。

(26) John H. Dixon, *Pitlochry, Pitlochry Past and Present: Being a Guide Book for Visitors and Tourists*, Pitlochry: L. Mackay, 1925. 同書にはディクソンが描いた水彩画三点の図版が掲載されている。ちなみに「日本の美術家」【①議長挨拶】でマーカス・B・ヒューイッシュは、ディクソンがスコットランドの自宅にイギリス人の水彩画家たちを招待するとともに、ディクソン自身も絵画の技術を上達させている、と紹介している。

(27) 漱石自筆画については、古田亮『特講 漱石の美術世界』岩波現代全書、二〇一四年、二〇〇～二二四頁を参照。

(28) ディクソン邸滞在中の金之助は、一九〇二年一〇月の岡倉由三郎宛書簡（本稿前半で引用した書簡）で「小生は十一月七日の船にて帰国の筈」と述べていた（『全集』第二二巻、二六四頁）。しかし実際には帰国を約一ヶ月遅らせ、一二月五日発の博多丸でロンドンから出航している（前掲、荒正人『漱石文学全集 別巻 漱石研究年表』二〇四頁）。この点について金之助は、スコットランド旅行からロンドンに帰ってきた際に、帰国時期を遅らせた理由として「蘇格蘭へ旅行して、予定よりも長逗留をし、荷物が出来ない為めだ」と藤代禎輔に語っている。詳細は、前掲、素人（藤代禎輔）「夏目君の片鱗」七四頁を参照。

(29) 漱石と絵画については、前掲、古田亮『特講 漱石の美術世界』が詳しい。

(30) この点については、「日本の美術家」【②ディクソンの論文】の注で記載した日本人洋画家の略歴を参照。特に金之助が渡英した一九〇〇年前後の時期は、複数の美術家が渡欧していたことがわかる。

(31) その一例としては「日本の美術家」【③ディスカッション】における、G・C・ハイテ（George Charles Haité 1855–1924）の発言を中心とする議論を参照。